

## 10. 中国における権力と神獣 —龍を中心に—

森 達也\*

龍は現代中国を象徴する神獣であるが、宋王朝から清王朝までの歴代王朝（10世紀から20世紀初頭）では、国家の中心となる皇帝を象徴する神獣として位置づけられていた（図1）。

中国における龍の図像の初現は新石器時代にまで遡り、商代（前17～前11世紀）の甲骨文字には既に「龍」の文字が認められる。当初は、権力者や国家を象徴するといった位置づけをもつことはなかったが、漢王朝（前206年～後220年）の開祖である高祖・劉邦が赤龍の息子であり、「龍顔」を持つとされた（『史記 高祖本紀』）ことを契機に、次第に権力者との距離が近くなり、宋代（960年～1279年）には皇帝を象徴するようになった。

本発表では、「龍」がどのようにして国家権力と結びついたかということを中心に、中国における龍の位置づけの変化を概観してみたい。



図1：九龍壁（北京北海公園）清代18世紀

### 1. 龍の原形

龍は一般的には伝説の動物とされているが、鱗でおおわれた細長い胴、歯の並ぶ大きな口、角、鋭い爪をもつ四肢、耳などの形態的特徴（戦国時代後期に確立した龍の特徴）から、何らかの实在の生物が原形となったのではないかの説が示されている。代表的な説としては、①：蛇、②：鱈、③：様々な動物の特徴を合成、の三つが挙げられる。

①については、蛇の長い胴や鱗、大きく開く口、鋭い目など形態が龍と似ることと、龍が水とが深い関係を持つことなどを根拠して唱えられたものである。ただし、蛇には龍を特徴づける四肢や角、歯などは認められず、相違点も少なくない。

\*早稲田大学大学院 史学（考古学）専攻修了、金沢大学大学院後期博士課程を単位取得後退学、文学博士（金沢大学）。東京・日野市教育委員会文化財担当学芸員を経て、愛知県陶磁資料館学芸員。現在は主任学芸員。愛知県立大学多文化共生研究所客員共同研究員を兼任。フィールドワークを中心とした中国陶磁考古学研究。

②は、中国南方に生息する揚子江ワニまたは日本で化石が発見されたマチカネワニが龍の原形ではないか<sup>1</sup>との説である。ワニの歯が並んだ大きな口、目、鋭い爪を持つ四肢、長い尾、鱗、生活域などの特徴が龍と共通することによるが、ワニの体は龍ほど長くはなく耳や角も認められないことなど相違点も認められる。

③は、南宋・羅願の『爾雅翼』（後漢・王符『爾雅』の注釈書）巻二十八「釈龍」にある「龍に九似あり、頭は蛇に似る、角は鹿に似る、目は鬼に似る、項（うなじ）は蛇に似る、腹は蜃（みづち）に似る、鱗は鯉に似る、爪は鷹に似る、手は虎に似る、耳は牛に似る。」という記載を根拠に取り上げられることが多い。この説では後漢・王符の説とされており、龍の形態が現在のものとほぼ変わらない形となった戦国後期からかなり時間を経た後漢の段階の認識を基に龍の原形を考察することにはやや無理がある。ただし、この説には上述の蛇説やワニ説の解説で指摘したように単独の原形から生み出されたとする場合に問題となる形態的相違部分を合理的に説明することが可能である。

そのほか自然現象の「たつまき」や虹を龍に関連づける説や、龍がかつて実在したなどの説があるが、上述の三つの説よりはかなり根拠が薄弱である。

このように、龍の原形については諸説があり現時点では定説といえるものはないが、筆者としては③の様々な動物の特徴を合成したという説が最も合理的であると考えている。

## 2. 新石器時代から商・周代の龍

中国で龍と考えられる図像の最も古い例は、新石器時代にさかのぼる。

内モンゴ、河北省、遼寧省などに広がった紅山文化（前 4700 年頃～前 2900 年頃）では、C 字形の龍の玉飾が作られた（図 2）。紅山文化の龍玉には四肢は見られないが、角や細長い胴、大きな口などの特徴は後代の龍と共通するものであり、龍の源流の一つと考えられている。

新石器時代の彩陶にも龍の源流と思われる図像が描かれたものが散見される。

図 3 は陝西省宝鶏市北首嶺遺跡で発見された彩陶で、龍と思われる細長い胴の動物と鳥が描かれている<sup>2</sup>。仰韶文化（前 5000 ～前 3000 年頃）の前期に属する。

図 4 は山西省襄汾陶寺遺跡から出土した彩陶の鉢で、鱗、歯を持つ口、枝分かれした舌などの特徴をもった長い胴の動物が描かれている<sup>3</sup>。新石器時代晩期の龍山文化（前 3000 ～前 2000 年頃）後期に位置づけられている。

こうした土器に描かれた胴の長い生物の画像は後代の龍の特徴とは完全には一致しないが、龍の源流として位置づけられることが多い。

1987 年に発掘された河南省濮陽・西水坡遺跡では、仰韶文化（前 5000 ～前 3000 年頃）前期の墓から、埋葬された遺体の間に貝を並べて描かれた龍と虎と思われる図像が発見された<sup>4</sup>（図 5）。龍と思われる図像は四肢と長い尾、大きな口などをもち、後代の龍とかなり近い特徴を有している。



図 2(上)：龍形玉飾 紅山文化

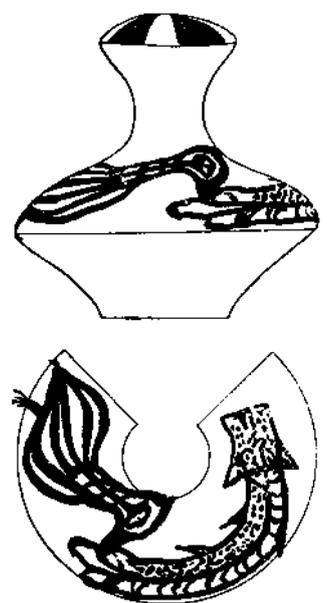


図 3(右)：彩陶龍鳥紋壺  
陝西省宝鶏市北首嶺遺跡出土



図 4：彩陶龍紋鉢 山西省襄汾陶寺遺跡出土

<sup>1</sup> 青木良輔『ワニと龍 - 恐竜になれなかった動物の話』平凡社 2001 年。

<sup>2</sup> 中国社会科学院考古研究所『宝鶏北首嶺』文物出版社 1983 年。

<sup>3</sup> 中国社会科学院考古研究所山西工作隊ほか「1978-1980 年山西襄汾陶寺墓地発掘簡報」『考古』1983-1。

<sup>4</sup> 濮陽市文物管理委員会ほか「河南省濮陽西水坡遺址発掘簡報」『文物』1988-3。

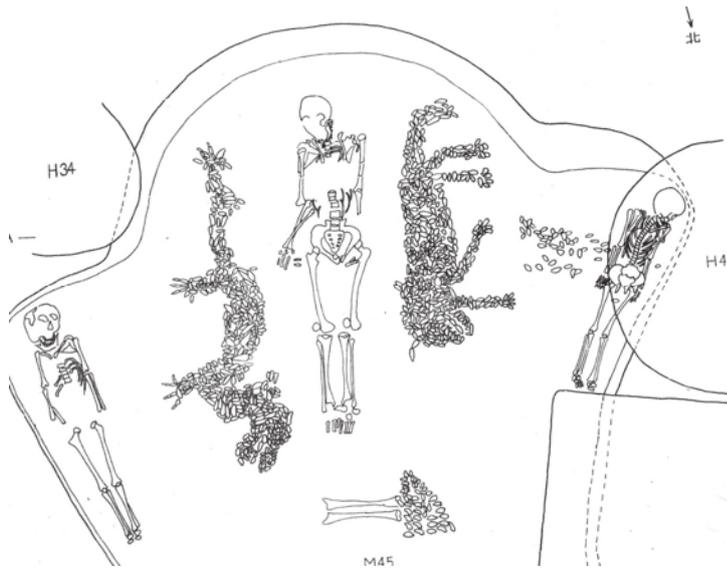


図5(左): 龍と虎の貝画 河南省濮陽西水坡遺跡

図6(右): 青銅夔龍鼎 西周 前11~前10世紀 陝西省淳化県出土

こうした例から、新石器時代には龍の原形が確立していたと考えられる。

初期王朝の時代になると龍の姿はさらに明確化してくる。商代の甲骨文字や金文には「龍」字の原形が出現しており、商・周代の青銅器(図6)や玉器、石製品の装飾には龍紋の装飾が施されるものが少なくない。

龍の姿が、現在と同じ、鱗でおおわれた細長い胴、歯の並ぶ大きな口、角、鋭い爪をもつ四肢、耳などの形態的特徴をもって表わされるようになるのは戦国時代(前5世紀~前221年)末期から前漢代(前206~後8年)初期である。

最も有名なのは湖南省長沙馬王堆1号墓(前漢初期)より発見された漆棺や帛画(絹布に描かれた絵画)に描かれた龍である<sup>5</sup>(図7,8)。前述の龍の特徴を完全に有しており、この墓の前漢代前期という年代から見てこうした龍の姿は遅くとも戦国時代末期には完成していたと考えられるのである。

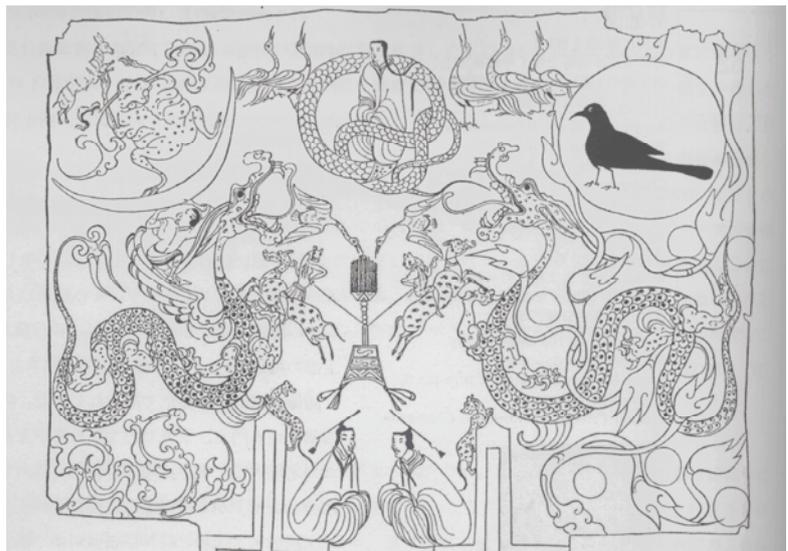


図7(左): T形帛画 湖南省長沙馬王堆1号墓出土

図8(上): 馬王堆1号墓出土T形帛画の模写(上部)

<sup>5</sup> 湖南省博物館編『長沙馬王堆1号漢墓』文物出版社1973年。

### 3. 戦国末期から漢代の龍の多様性

龍の図像がほぼ完成した戦国時代末期（前3世紀）から漢代（前206年～後220年）の龍にはさまざまな役割や位置づけが認められる。

長沙馬王堆漢墓出土の漆棺や帛画の画像を図像学的に分析した曾布川寛の研究によると<sup>6</sup>、この時期の龍には、①：天帝より地上に遣わされて死者の魂を天界へと運ぶ役割、②：太陽と月を運ぶ役割、などが認められる。

①の役割については、古代の中国人が、人は死ぬと「魂（こん）（靈魂）」と「魄（はく）（肉体的なもの）」に分かれて、魂は天界に昇り、魄は地に戻ると考えていたことにかかわっている。死者の魂は龍が引く舟または車、龍舟（車）に乗って天界に昇ると考えられ、戦国末期の湖南省長沙子弹庫楚墓出土の帛画<sup>7</sup>（図9）と馬王堆1号墓のT形帛画や3号墓のT形帛画の中段の図像（図10）は墓の主人が龍舟に乗って天界に昇る状況を描いたものであるとされている<sup>8</sup>。

②の役割については、馬王堆1号墓のT形帛画や3号墓のT形帛画の上段に描かれた太陽と月が龍の背に乗っていることによる（図8）。

漢代にはその他に、③：雨乞いの対象（雨を降らせる役割）、④：四神の一つで東方を司る「青龍」、④：十二生肖（十二支）の「辰」（後漢より始まる。王充『論衡』言毒篇に「辰為龍、巳為蛇。辰、巳之位在東南」とある。）など、自然現象、方位、天体などにかかわる龍の性格が認識されていた。

また、龍の出現が善政や聖人の出現を示す祥瑞として記録されることもあり、瑞獣としての性格も持っていたことが知られる。祥瑞の記録が多く残されている『漢書』「宣帝紀」には、甘露元年（前53年）と二年（前52年）に黄龍が出現したとの記載がある。

このように戦国から漢代の龍には、天界、水、方位、天体、祥瑞など神仙世界や自然とかかわるさまざまな性格が付与されており、古代中国人の社会や文化、生活に深くかかわる存在となっていたことがわかるのである。

もともと中国の社会全体に深く結びついていた龍は、漢代を境に皇帝との関わりを深めていった。

司馬遷の史記には漢王朝の始祖・高祖劉邦が赤龍の子であるという記載があり、また劉邦の顔を「龍顔」と表現している。これを契機に龍は皇帝、または国家権力と関係を深めていったのである。



図9：帛画 湖南省長沙子弹庫楚墓出土

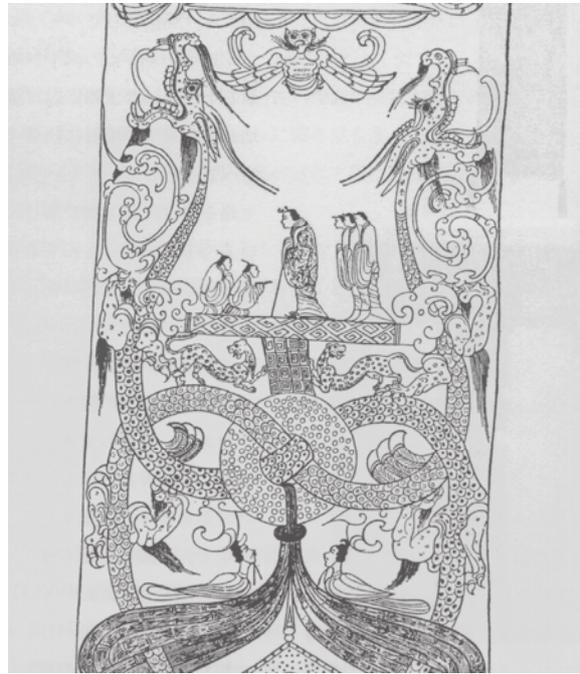


図10：馬王堆1号墓出土T形帛画の模写（中央部）

<sup>6</sup> 曾布川寛『崑崙山の昇仙』中公新書1981年。

<sup>7</sup> 湖南省博物館「新発見的長沙戦国楚墓帛画」『文物』1973-7。

<sup>8</sup> 曾布川寛『崑崙山の昇仙』中公新書1981年。

#### 4. 隋、唐代の龍

漢王朝が紀元 220 年に滅び、3 世紀から 6 世紀にわたる魏晉南北朝期の分裂時代を経て、589 年に隋王朝（581～618 年）によって中国は再び統一された。隋代には、煬帝が江南と中原を結ぶ大運河を完成させ、その運航のために皇帝の専用舟である龍舟を建造した。こうした事例から皇帝の御座船や御座車などに龍の名が使われたことがわかる。

唐代（618～907 年）には、開元十八年（730 年）に皇帝・玄宗（在位：712～756 年）の誕生日（千秋節）に臣下が玄宗に盤龍紋鏡を献じ、玄宗が四品以上の王公や官人に盤龍鏡や双鸞鏡を下賜するということが行われ、以降これが毎年慣例化した（「以千秋節百官献賀、賜四品已上金鏡珠囊纁綵」『旧唐書』卷8 玄宗紀上）。皇帝に龍紋鏡を送るという行為は龍が権力の象徴となっていたことを物語っているが、同時に皇帝も龍紋鏡を臣下に下賜していることから、龍は唐代にはまだ皇帝に独占されていなかったことがわかるのである。また、李白の詩「代美人愁鏡二首」には「美人贈此盤龍之寶鏡 燭我金縷之羅衣」（『全唐詩』卷184 45）の句、孟浩然の「同張明府清鏡嘆」（『全唐詩』卷159 59）には「妾有盤龍鏡 清光常晝發」の句があり、龍紋の銅鏡が唐代には女性にも使われていたことが知られる。

唐代の伝奇小説『柳毅伝』には洞庭湖の龍王とその娘が登場し、龍が水や雨、雷などを司ることが物語られており、龍と水との関係に対する認識が前時代と大きく変化していないことがわかる。また、唐代晩期から五代（9 世紀～10 世紀）の越州窯青磁の「罍（おう）」と呼ばれる副葬用器には龍紋が貼りつけられるものがあり（図 11）、漢代に見られた死者の魂を天界に導く龍の役割が、江南地域（長江以南地域）においては唐代においても引き続き認められるのである。

#### 5. 宋、元代の龍と鳳凰

907 年に唐王朝が滅びると、中国は再び分裂状態となったが（五代十国：907～960 年）、約 70 年を経た 979 年に宋王朝が再び中国統一を果たし、絶対権力をもった皇帝が、科挙（試験）によって採用した官僚組織に支えられて治世を行う君主独裁制の国家体制が形成された。

この宋王朝の時代に、絶対権力を手にした皇帝による龍の独占が大きく進んだのである。

北宋代（960～1127 年）の景祐三年（1036 年）には、民間での龍形の装身具の使用を禁止し（『宋史』卷 153 士庶人車服之制）、元符年間（1098～1100 年）に皇帝以外の衣服に龍の意匠（昇り龍）の使用禁止令が出され、政和元年（1111 年）にも再び同様の禁令が出されている（『宋会要稿』輿服四之七）。このようにして皇帝による龍の独占が開始され、龍は皇帝の象徴としての位置づけが明確化されたのである。

なお、北宋の二代皇帝・太宗の元徳皇后（元徳李后）墓（1000 年葬）からは、当時の最上質の青瓷である越州窯の秘色瓷器の龍紋盤が出土しており<sup>9</sup>（図 12）、龍が北宋皇室の権威の象徴となっていたことを物語る実物資料として重要な意味を持っている。

南宋代（1127～1279 年）には、左右の角が二股に分かれた二角（双角）で足の先の爪（指）が五本（五爪）である「二角五爪」の龍の意匠が皇帝の象徴として確立していた可能性が宮崎市定によって指摘

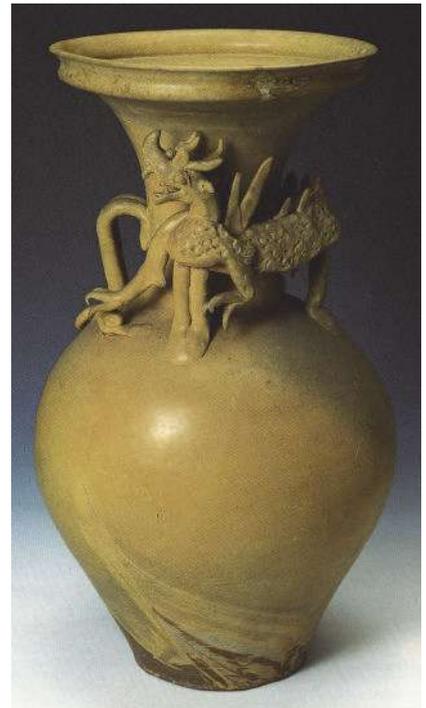


図 11: 青瓷龍紋罍 越州窯  
浙江省上虞市豊惠鎮廟后山乾符六年（879 年）墓出土

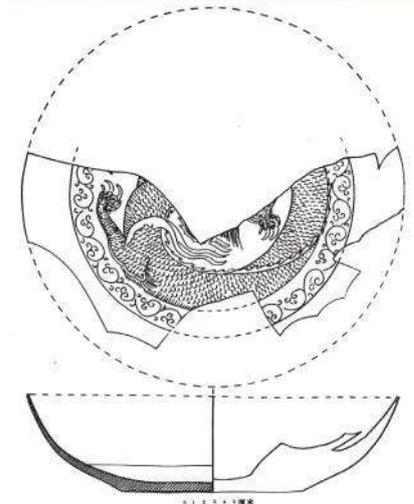


図 12: 青瓷龍紋盤 越州窯  
北宋 元徳皇后墓（1000 年葬）

<sup>9</sup> 河南省文物考古研究所編『北宋皇陵』中州古籍出版社 1997 年。

されている<sup>10</sup>。

北宋朝を 1127 年に滅ぼして、中国北半を支配下に置いた女真族による金王朝（1115～1234 年）でも、龍紋は皇帝の象徴として用いられた。当初は皇后や太子、三公（高官）の衣服にも龍紋が許されたが、後に太子、三公の龍紋の使用は取り消されたようである。また民間での龍紋の使用についても禁令が出されている<sup>11</sup>。

12 世紀初頭にチンギス・ハーンに率いられて蒙古平原から興ったモンゴル軍は、1234 年に金朝を下し、1271 年には元朝を建て（1271～1368 年）、1279 年には南宋を滅ぼしてついに中国を統一した。

元朝は、金の遺風を引き継いで龍を皇帝の象徴とし、「大元」の国号制定の前年である至元七年（1270 年）に、民間での日・月・龍・鳳の文様の織物の製造を禁止した（『元典章』卷 58 工部 緞疋条）。大徳元年（1297 年）には、民間で皇帝が用いる五爪の龍の爪の一つ減らして四爪とした大龍紋の衣服を作っているのを禁止するべきかと皇帝に諮問したところ、「四爪の小さな龍ならば禁止する必要はないが、全身を覆うような大龍紋は禁止するように」といった聖旨があったという記録がある（『元典章』卷 58 工部 緞疋条）。その後も大徳十一年（1307 年）に「五爪双角」龍の衣装の民間での製造禁止、延祐元年（1314 年）には龍鳳紋（龍は五爪二角）の使用禁止令など、たびたび禁令が出されている。

また、元代後期の景德鎮窯では二角五爪龍紋の青花瓷器が生産されているが（図 13）、これらは皇帝または宮殿のために生産されたと考えられている。また二角四爪や二角三爪の龍紋瓷器も生産されており、これらは民間用や輸出用と考えられる。

このように元代には二角五爪の龍紋が皇帝に独占される状況になっていた。しかし、たびたび民間への禁令が出されていることから見て、絶対的に順守されていたわけではなく、違反も少なくなかったと思われるのである。

なお、中国南部の江南地方では、北宋から元時代にかけて、龍紋が施された白瓷や青白瓷、褐釉瓷などの瓶や壺が生産されている（図 14）。これらは副葬用器として作られたもので、前時代に見られた死者の魂を天界に導く龍の役割が引き続き認められる。

このように宋、元代の皇帝による龍紋の独占は、決して全ての龍に及んだのではなく、主に二角五爪の龍に限定され、それ以外の龍は前時代から引き続き、中国の社会全体に浸透して、さまざまな役割を担っていたのである。



図 13(上)：青花五爪龍紋圜碁罐 景德鎮窯 元  
景德鎮珠山北麓風景路出土

図 14(右)：青白瓷龍紋魂壺 景德鎮窯 元（1306  
年） 江西省上饒市出土

<sup>10</sup> 宮崎市定「二角五爪龍について」『宮崎市定全集 18』岩波書店 1993 年（初出『石田博士頌寿記念東洋史論叢』1965 年 8 月）。

<sup>11</sup> 宮崎市定「二角五爪龍について」『宮崎市定全集 18』岩波書店 1993 年（初出『石田博士頌寿記念東洋史論叢』1965 年 8 月）。

## 6. 明、清代の龍と鳳凰

元を北に追い払って建国された明王朝（1368年～1644年）は、元の遺制を引き継いで二角五爪の龍文を皇帝の独占とした。

明の歴代皇帝の公式の肖像画が故宮博物院に残されているが、それによると全ての皇帝は二角五爪の龍文を胸に大きく施した朝服（龍袍）を着ている（図15）。

洪武二十六年（1393年）には、官吏、軍人、僧侶、道士ほか民間人に衣装に黒、黄、紫の色を用いることおよび、龍鳳紋の衣服を作することを禁じた（『皇明典禮志』巻18 服色禁制条）。洪武六年（1373年）には、一品から六品の官員には四爪龍の衣服を着ることを許すとあるので（『欽定続文献通考』巻93 王礼考 文武官常服項 洪武6年条）、洪武二十六年の禁令にある龍は二角五爪の龍と考えられる。

天順二年（1548年）には官員や民間人が衣服に蟒（ぼう）、龍、飛魚、斗牛等を用いることを禁じる令が出されている（『皇明典禮志』巻18 服色禁制条）。また、弘治元年（1555年）には龍を蟒と呼んで無断で着るものがあるが、それを禁止して正式に許可を得たものみに着用を許すという記録（『弘治実録』巻9 弘治元年正月甲子条）があるが、この蟒は恐らく四爪龍と同じ形態であったと考えられる。

明朝は景德鎮窯では二角五爪の龍紋を皇帝または宮廷用の瓷器に限定して施しており、厳密な管理が行われていた（図16）。また、明代初期の洪武年間から永楽年間を中心に龍泉窯でも皇帝や宮殿用の青瓷が生産されたが、こちらも二角五爪の龍紋は最上質品に限られていて、同様の管理が行われていたことがわかる（図17）。

李自成の反乱によって1644年に明朝が滅びると、満洲族が建てた北方の清王朝（1636～1912年）が中国に侵入し、全土を制圧した。

清朝も明の遺制を引き継ぎ、二角五爪の龍文を皇帝権力の象徴としたが（図18）、明のような皇帝による完全独占制はとらなかった。皇帝のほか、皇太子、皇子、親王、郡王などの皇族が五爪の龍文を用いることが許されたが、郡王は正面向きの五爪龍は許されず、横向きのみであった。なお、郡王の次の爵位である貝勒（ベイレ）は四爪の蟒しか許されなかった（『皇朝通志』巻58 器服略3）。『皇朝通志』の記載から見て、清朝においては四爪以下の龍は、龍ではなく蟒であると公式に分類されていたようである。

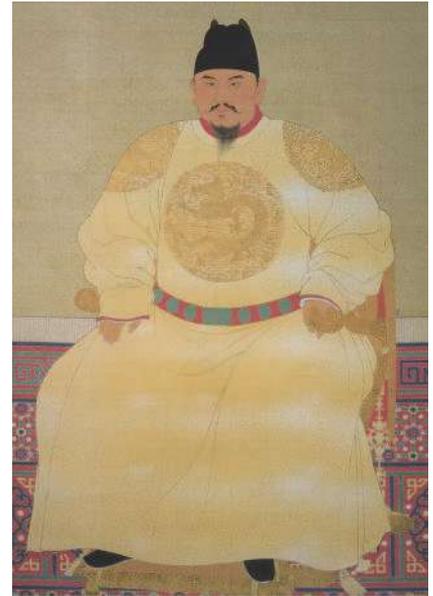


図15: 明・洪武帝（在位：1368-1398）肖像  
台北・国立故宮博物院



図16(左): 青花五爪龍紋梅瓶 景德鎮窯 明・永楽期  
イラン・アルダビール廟

図17(上): 青瓷五爪龍紋盤 龍泉窯 明・洪武期  
北京・故宮博物院

なお、明朝と同様に清朝でも景德鎮官窯で二角五爪の龍紋を皇帝または宮廷用の官窯瓷器に限定して施しており、厳密な管理が行われていた。

また、明・清代の官員たちは、公式の席では鳥や獣の紋様を刺繍した補子（四角いゼッケン）を胸と背につけた補服（礼服）を身に付けた（図 19）。この補子の紋様は文官は鳥、武官は獣であり、鳥や獣の種類によって官位を示した。文官は一品鶴、二品錦鶏、三品孔雀、武官は一品麒麟、二品獅子、三品豹というように官位ごとに鳥や動物の種類が決められていたのである（時代によって変化あり）。皇帝をあらゆる五爪龍を中心に、さまざまな鳥・動物が階層化されて権威の象徴として用いられ、皇帝を中心とした官僚体制の組織化に大きな役割を果たしたのである。

## 7. まとめ

新石器時代に蛇やワニなどさまざまな動物の特徴を重ね合わせて自然発生的に誕生した龍は、戦国末期から前漢時代頃にはほぼ現在の姿となり、神仙世界や自然とかかわる靈獣としてさまざまな性格が付与されて、古代中国人の社会や文化、生活に深くかかわる存在となっていた。漢時代にはこうした多彩な性格の上に、漢王朝の始祖・劉邦が赤龍の子であるという伝説が付加されて、龍は次第に権威の象徴としての地位を得るようになっていった。隋・唐代には皇帝の権威を示す意匠として用いられたが、宋代になると皇帝そのものの象徴となり、皇帝は龍の独占化を試みた。しかし、中国社会に根付いた龍を民衆から取り上げて皇帝のみのものとするのは不可能であり、二角五爪という特別な姿の龍を作り出して、その独占化を図ったのである。二角五爪龍は、南宋から元、明、清の約 700 年間にわたって皇帝によって独占されたが、明・清代には二角五爪龍以外の龍は、龍ではなく蟒と分類されて、皇帝による龍の独占はさらに進んだ。このように、漢代以降、龍は時代が下るに従って皇帝権力に取り込まれて行った。しかし、それはあくまでも表面的なものであり、民衆の生活に根付いた龍にかかわる文化や信仰は、権力や権威に完全に取り込まれることはなく、今日まで脈々と生き続けているのである。

また、中国には龍のほかに鳳凰や麒麟などその風土の中で自然発生的に生み出されたさまざまな靈鳥、靈獣がいるが、それらの多くは宋代以降に皇帝を中心とした集権的、独裁的な統治体制が整備される中で、官僚組織の秩序化や権威化に利用されていったのである。



図 18: 清・乾隆帝(在位:1735-1796)肖像 北京・故宮博物院

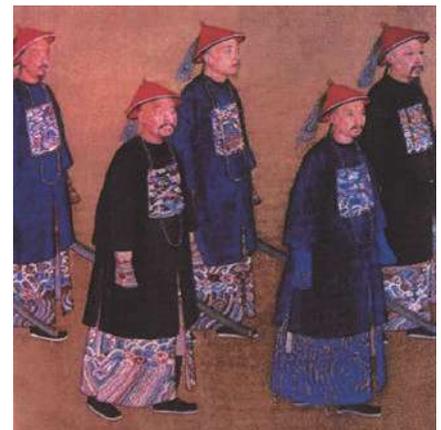


図 19: 補服を着る官人 清

## 参考文献

- 青木良輔『ワニと龍 - 恐竜になれなかった動物の話』平凡社 2001 年。
- 曾布川寛『崑崙山の昇仙』中公新書 1981 年。
- 宮崎市定「龍の爪は何本か」『宮崎市定全集 18』岩波書店 1993 年（初出『洛味』第 13 集 1964 年 2 月）。
- 宮崎市定「二角五爪龍について」『宮崎市定全集 18』岩波書店 1993 年（初出『石田博士頌寿記念東洋史論叢』1965 年 8 月）。
- 林巳奈夫『龍の話』中公新書 1993 年。
- 河南省文物考古研究所編『北宋皇陵』中州古籍出版社 1997 年。
- 湖南省博物館「新発見的長沙戦国楚墓帛画」『文物』1973-7。
- 中国社会科学院考古研究所『宝鶏北首嶺』文物出版社 1983 年。
- 中国社会科学院考古研究所山西工作隊ほか「1978-1980 年山西襄汾陶寺墓地発掘簡報」『考古』1983-1。
- 濮陽市文物管理委員会ほか「河南省濮陽西水坡遺址発掘簡報」『文物』1988-3。

## 10. Power and the Sacred Animal in China —A Study on the Dragon—

Tatsuya MORI\*

The sacred animal, Dragon, is nowadays known as the symbol of contemporary China. This illustrious divined animal has been recognized historically as the status symbol of the imperial power during from the Song to the Qing Dynasties.

The image of the Dragon was first appeared in the Neolithic era in China, and also we can see the ideograph “Dragon (龍)” on several oracle bones of the Shang Dynasty (17th-11th B.C.E.).

The ancient Dragon images were tightly connected with the religious spirit and the nature, then, the character itself changed to involve much more political meanings when Liu Bang, the founder of the Han Dynasty (206 B.C.E.-220 C.E.), was widely believed as an reincarnation of the Red Dragon.

The Dragon motif was used as the symbol of imperial authority during the Sui and Tang Dynasties. Then the crucial conversion on this custom was occurred in the next Song Dynasty, that its emperors had attempted monopolizing this Dragon motif only for monarchal use. However, since the Dragon motif was deeply penetrated into the public, it was impossible to make this Dragon motif totally exclusive. Then, the imperial court had created the special new Dragon image having a couple of horns and five talons (二角五爪) for imperial exclusive. So that this image had been appeared as the imperial symbol for almost 700 years long, during the times of the Southern Song, the Yuan, the Ming and the Qing Dynasties.

Since then, various Dragon images were strictly classified and even forced to change their names, like every Dragons except having a couple of horns and five talons were simply called “the Serpent (蟒)” to look down on, and on the other hand, to raise the magnificent image of their “Dragon”. However, these trials by the successive rulers were failed to change the sacred substance of traditional Dragon images.

Without being assimilated with any power or authority, popular cultures and cults related with sacred Dragons are still vigorously surviving in contemporary China.

---

\*Aichi Prefectural Ceramic Museum